

2021年11月14日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ」

聖書：詩編121：1～8

詩編は、神への祈りである。その詩編の祈りは、嘆きや悲しみ、苦しみが神への問い、叫びとしてある。もちろん喜びの祈りもある。この121編は宮詣で巡礼の旅の祈り。

「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか」と、不安がつづられている。でもその時、教えられていくことは、「わたしの助けは来る、天地を造られた主のもとから」と。旅の行く手を立ちほだかるかのように険しい山々が並び、その山々におびえる中で、私の神はその山々をも創られた神なのだ、信仰に立ち帰って行く。この詩篇の1、2節の主語は「わたし」になっていて、不安と確信がつづられているが、3節以降では、その「あなた」を支える執り成しの祈りが捧げられている。

「わたしの助けはどこから来るのか」と苦しい状況に立たされている者を覚え、「あなた」の信仰を支える者がいるということ。「どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。・・・」と続く。

私たちは、一人で頑張っていると思う時がある。しかし決してひとりではない。必ずあなたのことを思って祈っている方がいる。あなたの信仰が無くならないように、共に礼拝にあずかれるように、私たちは必ず誰かに祈られている。そのことを私たちは覚え、信仰の支えとしていきたい。また、私たち自身が誰かのために、執り成しの祈りを捧げる者としてもありたい。

そして信仰者として歩む私たちの教会は、この世の「地の塩」としての役割を担っているか、「世の光」としての輝きを発しているだろうか。教会に連なる私たちは、その役目を担っているか。世の状況をしっかり見、メッセージを発信し、また私たちの教会に出来ることを担って行きたい。

「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ」とは、神を求める信仰を表す。私たちは、「目を上げて」希望を持って、歩んで行きたい。そして、「わたしの助けは来る」とは、「天地を造られた主のもとから」来るという信仰に立つということであるが、教会もまた、「あなた」の助けとなって行く必要が当然ながらある。教会は、「あなた」の助けになっているだろうか？教会はあなたと共に、嘆き、悲しみ、苦しみ、また共に喜ぶ教会としてあるだろうか。

教会が、あなたの助けになるように、そんな教会づくりを皆さんと一緒に作り上げていきたい。（神谷）